

争論される

回避

世紀末のユートピア論

特集

特集

22

窓

(1994)

論争未発の象徴天皇制 ● 島根大学「小論文」入試問題とその波紋
 検証不在の『ちびくろサンボ』絶版問題 ● なせ学会は論争を回避するのか
 論争無用の「科学的社会主義」 ● 暴論する日本共産党分析のための「資料」
 起死回生の社会主義論 ● もつと議論を!

問題としての野坂参三 ● 歴史の抹消と沈黙は許されるか

ユートピアってなんだ? ● 予定調和的なもの
 ナウシカあるいは旅するユートピア ● 一歩を踏み出す
 「風の谷のナウシカ」試論 ● 〈道徳〉と死
 子どもとユートピア ● くまのりくくらの唄

北朝鮮のなかの日本、日本のなかの北朝鮮

争論の巻 特集 論争の巻 起死回生

歴史にたいする責任 ● 社会科学の再生のために 伊 健次
 現代における論争の再生のために 島 崎 隆
 論争するベネストロイカ ● エリツィン、サハロフの溝 藤 井 一 行
 知識階級の形成をきく ● マルチン・クラウゼ、林義典の暴論をもと 矢 野 修 次 郎
 「ポスト・モダン」状況と論争 宇 波 彰
 花田・吉本論争の思想の構え ● 吉本隆明の政北 石 井 伸 男
 試される現実主義的理想主義 ● 外国人労働者及び北朝鮮化 宮 島 喬
 現代日本資本主義と象徴天皇制 加 藤 哲 郎
 「革新回帰」現象は一時的か構造的か 志 田 界
 伝統的常識的教育学批判 ● 規範主義と権威主義をこえて 西 本 肇

「他世」の問題と主体の喪失 ● エルゲネイトとちびくろサンボ 鈴木 一 策
 コンテンポラリーソウシヤリズムの可能性 ● 生活意識の探求 谷 口 孝 男
 一九八九年六月四日天安門への道 ● 民主化運動の経緯・費良・盛望 行 其 依
 ベネストロイカは国際協力政策だろうか ● オーストリアをきく ● 藤 左 近 敏
 〈大衆社会〉と〈プラトン主義〉の茶間 吉 茂 田 宏
 最後の森戦! 科学的社会主義 ● 貧困と救済の戦方 石 村 多 門
 もうひとつのサミット ● 世界最後七ヶ国会議 コーリン・コバヤシ 関 根 謙
 地方から見た「89民主化運動」 ● 日問見え書き

アンケート 未完の論争

石 井 伸 男
 小 浜 浩 郎
 江 本 嘉 伸
 *
 中 野 徳 三
 宮 本 太 郎
 石 飛 仁
 *
 米 谷 匡 史
 守 一 雄
 高 橋 彦 博
 海 野 八 尋

田 中 啓 一
 田 中 啓 一
 *
 田 中 啓 一
 *
 田 中 啓 一
 *
 田 中 啓 一

伝統と民主主義のリバイバル ●ハンガリー改革のゆくえ 南塚信吾
ハンガリー新憲法改革システムの展開 ●新社会主義経済思想をめぐって 西村可明
ベネストロイキはいつかして勝利を飾らるか? ●ソ連の経済改革の展開 上島 武
新たな批判学派の誕生 ●ソ連の多党制と社会主義の継承性を探る 上野勝男
知識人の自立への模索 ●中国社会主義の希望 丸山 昇
雑誌を閉くと社会がみえる ●最近ソ連経済事情 浦 雅春
ソ連の集会を歩く ●存在の生きた花をどこに求めるのか 井布貞義
暮らしのなかのベネストロイカ ●なき者あり、なき者おいてなき 石川晃弘
チンギス・ハーンの再評価 ●モンゴル人民共産党のベネストロイカ 江本嘉伸

ウエーバーの社会主義論 ●今日の問題のための原理的考察 佐部幸隆
国際論争 「日本的経営」は世界になにをもたらすか?

ポスト・フォード主義からウルトラ・フォード主義へ 加藤哲郎
手 加藤哲郎 R.ステイブーン M.ケニー R.フロリダ
ハンガリー・決定的転換か、変革の兆しか? ●東欧の意

1. パルロー / いわな、やすのり 訳

帝国崩壊・教会分裂・民族大移動 ●歴史の分水嶺にて 古茂田宏
なにが問われるべきか ●産業化と都市化過程の非連続性による問題 安永弘紀
(論争)の前進のために ●島崎藤村に答えて 竹内秀郎
「従軍」の階級と市民の階級(下) ●ソビエトや東欧における労働 鈴木一策
トロツキイ復権の最新動向 ●ソ連における著作刊行と言論活動の事情 藤井一行
哲学的批判の基礎 ●感しき「哲学主義」から現実「批判」へ 石井 照
トロツキイ・マキシモ・トロツキイの旗 エスパン・ボルニウ氏直訳 工藤律子

アンケート 社会主義への視点

多言語・多文化統合体への実験 ●ポスト・ネーション時代 林 勝一
EC・国家・地域の交錯 ●1993年EC統合がもたらすもの 梶田孝道
小さな主体の潜在力 ●イタリヤ・サルデーニャ島の「両立」意識 新原道信
中部ヨーロッパ意識と小さな民族 ●スロヴァキアの「おぼろげな夢」 長興 進
分岐点に立つヨーロッパ ●資本主義・モダニズムはどこへ行くのか? 井戸正伸
新たなブロック経済に向けて ●日本にとっての足場ある未来 岸上慎太郎
現代資本主義論の方法 ●金融資本の支配構造と民主主義 松葉正文
ヨーロッパ共同体と文化 ●ヨーロッパ・ファイル EC委員会
孤独の味 ●「遅れたレポート」のムニヤチコが語る L.ムニヤチコ
ブルガリア・民主的反対派が団結すべき時 F.フオスコロ
ハンガリー・赤論で夜にまた逢い ●政治的暴力と意識の転換 P.グランドポール
不吉な影を落とす大ロシア主義 浦 雅春
アンケート EC統合をどう考えるか

国際論争 「日本的経営」は世界になにをもたらすか?

大企業を巡って ●日本における産業革命 佐部幸隆 M.ケニー/R.フロリダ
手 加藤哲郎 R.ステイブーン

コメント A.ゴードン J.クラウフ L.マルティノ 伊藤 隆 R.スン・ジエン 高橋祐吉

トロツキイとソルジェニツィン ●死後50周年 B.カガリツキイ
戦後歴史学と生活過程論 ●新しい歴史認識をめざして 河西英通
言葉は何を語りうるか ●鈴木一策論文によせて 安永弘紀
全体論(ホーリスム)を超えて ●自立的主体性はどこにあるか 河田雅圭
西ドイツ社会民主党大会傍聴記 ●ドイツ統一とヨーロッパの未来 小野耕二

東ドイツ知識人からの手紙 ●マルクス・レーニン主義研究所の改組 中野徹三
健在するライカール・プレス 矢野修次郎
近代国家の「毒れ方」 ●システムの風船 古茂田宏

緊急特集1 銃弾と言語、そして天皇制

銃弾よりも恐るべきもの
民主主義への夢
本島義典と左翼の構造
「言論の自由」を支える学問とは
基本になることから
ひとつの体験から
本島市長と民主主義の代償
天皇制そのものを問う議論を
自由に議論する場をつくりだす

日本共産党はどこへ行くのか? (I) ●読者部を員議院に問う 中野徹三
共同討論の民主集中制・放棄か、堅持か、改革か ●いざ、読者部をどう問わねば?
加藤哲郎 橋本剛 平田清明 藤井一行

国際論争 「日本的経営」は世界になにをもたらすか?

日本資本主義はポスト・フォード主義か? 加藤哲郎 R.ステイブーン
ポスト・フォード主義に挑む読者意識と意識の問題 A.リヒエツツ D.ルボルニエ

コメント B.エクレストン

共同性論へ ●能力の共同性・有用性・「優越者」 竹内書郎
フィンランド共産党の「解体」と再生 ●階級で意識を免く 徳原敏武
激動する世界と韓国知識人 ●20年ぶりの祖国への旅 尹 健次
ノーマ・社会主義とノーマ・ドイツ ●ドイツ統一と民主主義の未来 照井日出喜
ドイツ社会民主党新綱領と現代の左翼民主主義派 松葉正文
八九年革命党をめぐり ●資本主義へか、社会主義へか 上島 武
ポスト・レーニン主義が批判的レーニン主義か ●社会主義の継承 矢野修次郎
ティミショアラ以後の東欧 ●ポーランドとルーマニアの担持者に問う
T.マソウイェツキ O.パレル M.モスコヴィツチ

パラダイム・ロスト ●失業国における人間の言葉 古茂田宏
社会主義理論学会 海野八尋
アジア史学会 上田正昭
廃棄物学会 平山直道

季刊第4号 特集1 アジアが動く

韓国における社会変革論争 ●「マルクス主義」の復権から再考へ 文 京珠
アジアの労働力移動と日本資本主義の危機 ●外国労働者問題に関する 佐々木建
ベトナム共産党でなにが起こっているか ●ドクイイ問題 藤原あぐり
民主主義を問う「歴史」と「運動」 ●ソ連・中国の多党制をめぐって 鷺見一夫
日本のなかのアジア、アジアのなかの日本 ●ロシアの復権をめぐって 村井吉敬
「ベルリン」の壁から「自由」の壁へ ●統一の過程と対立の歴史を巡る 辺 真一
アジアと沖縄 ●辺境の運命は可憐か 山門健一
車の根拠的運動のめざすもの ●「五か年計画」の目的と手段 北沢洋子
タイの映画 ●アジア映画の力 佐藤忠男

季刊第5号 特集1 国境とはなにか

国境について タケラズ・ラミス
連綿国家体制の構造運動 ●国境線が受ける「衝突」と意識をめぐって 多賀秀敏
「国境」概念の政治学 ●キチンズとロツカンの所説 田口寛久治

「北方領土」問題からみた国境・米が国境へ
 朝鮮人にとつての国境・政治的抑圧と内面的葛藤
 国境超えの文学・エッセイ文学の視点から
 心のなかの国境・私の国境体験
 国家主義的エゴイズムの過酷さ・私の国境体験

新崎盛徳
 伊 健次
 大工原ちなみ
 森 詠
 磯貝 浩

日本共産党はどこへ行くのかII ●東欧野蠻な革命軍を批判する
 共同村の民主集中制・放棄が堅持が改革か ●いま社会主義のなかにあるのか
 加藤哲郎 橋本剛 平田清明 藤井一行

中野徹三

ドイツシヨアラ宣言 (全文)

ソ連における出版の自由とはなにか ●異議を異議を異議のなかで
 社会的エゴイズムの再生を求めて ●悪の交戦と新たな進歩の道
 サッチャリズム ●つづいた経済政策
 チェコスロヴァキアにおける言論の自由と文学 ●あはれなき音楽の歌
 東欧激動とマルクス主義 ●マルクス理論の再検討は不可避
 新しい型の社会主義は可能か ●マルクス・レーニンの再構成
 郷と国際化
 日本環境教育学会 ●自然と共生への学際的アプローチ

武隈吾一
 矢澤修次郎
 小笠原欣幸
 栗栖健
 神田文人
 真田哲也
 李 長彬
 阿部 治

国際論争 「日本の経営」は世界になにをもちたか？
 M・ケニー&R・フロリダ
 S・ウッド B・テイラー K&J・ウィリアムス
 B・コリア 後藤道夫 宮本太郎 平田清明

第6号 特集II 民族とはなにか

民族問題とベレストロイカ B・カガリツキ

国家は死すとも民族は死なず ●民族のアイデンティティとはなにか
 自立をめざすバルト三国 ●国民国家概念の乗りこえ
 東欧の地殻変動のなかの小さな民族 ●スロヴァキアの「秘密喧嘩」
 アラブ民族主義とパレスチナ問題 ●戦後の国際関係のなごりなごり
 アイスから日本人へ ●一人のアイスのヨロベオ
 在日一世の思想 ●移民民族体験の精神構造
 ナショナリズムと市民社会原理 ●「ヨーロッパ」風俗画家を出版して

関 晴野
 百瀬 宏
 長興 進
 葛岡信雄
 重野 茂
 伊 健次
 村山紀昭

イタリア共産党の「壮年なる冒険」 ●戦後ソ連による継承は可能か 後 房雄
 イタリア共産党党内論争資料集①②③

日本共産党はどこへ行くのかIII ●東欧社会主義の終焉とわれわれの葛藤
 トロツキイのネジ論 ●ベレストロイカのための不可欠な基礎 V・ピリク
 トロツキイとレーニンの「遺言」 ●クルシヤ問題をめぐって
 再定議すべき概念 ●ヒトラー・クンデとのインタビュー K・バルトシエク
 繰り返しのきかない道 ●ソ連のエコロジイ運動
 反スターリン主義を生きた ●新しい社会主義への思想的交流
 小選挙区制・二大政党・福祉国家 ●モデル分析と現実
 現代日本の社会構造と「配給・自費」 ●戦後における英米死後論
 悲しみなき死 ●知性と理論の継承
 アルチエールの遺産とわたしたちの世代
 哲学教授の孤独な死について考える
 アルチエールの死 ●一つの時代の終焉
 政治・生活・ジャーナリズム風俗 ●民主化にゆれるモンゴル
 ベレストロイカの若者たち ●恋心をめぐる飛鳥と映像
 日本熱帯生態学会 ●破壊された生態系の修復をめざして

後 房雄
 中野徹三
 藤井一行
 武隈吾一
 矢澤修次郎
 志田なや子
 大門正克
 石井 深
 鷲田小彌太
 大枝秀一
 平田清明
 江本嘉伸
 岩田 貴
 筱野和彦

第7号 特集II どこへ行くベレストロイカ

危機に瀕するベレストロイカ ●ゴルバチョフ大統領へ
 バルトへの武力介入はなにを意味するか ●戦前とゴルバチョフ
 ポスト・ベレストロイカの諸問と構想 ●新たな諸問題を意識する
 市場経済移行問題と労働力問題 ●不良と過剰のシレー
 ソ連宗教界の活性化と新たな困難 ●自由化のもたらしたも
 クラスノダールの二重の危機 ●言論統制の復活と自由の過激化
 新聞を解放し、ソビエト権力の概念を修正せよ ●「モスクワ・ニューズ」編集長に聞く
 E・ヤコブソフ
 ソ連共産党になにが起こっているのか ●結出する委員の離反と対峙の形骸化
 O・ドゥアローヴェン
 ゴルバチョフ後のソ連のゆくえ ●動乱時代か、新しい労働者権力か
 B・カガリツキ

アンケート ベレストロイカをどう評価するか

新党創設のシラマイツクス ●イタリア共産党の「壮年なる冒険」 後 房雄
 イタリア共産党党内論争資料集④⑤
 日本共産党はどこへ行くのかIV ●変化した組織と批判的精神の死
 日本における戦争責任論の空疎 ●「西」問・東は「シ」問
 社会主義論争の運動 ●理論的共産主義の正統性とはなにか O・ラフオンテーヌ
 第一回トクノ選挙運動と選挙再構成 ●はたして「国境」だとな
 新種の偽造学派か ●選にけるトロツキイ研究の一動向 A・パンツォフ
 クラエトに必要なのはいかなる平和か ●その世界主義の死を
 過労死に注目する世界の労働運動 ●100年目の「ソ」問
 イタリア共産党最後の大会 ●継承を待たした「連帯」の観

中野徹三
 高橋彦博
 O・ラフオンテーヌ
 山本佐門
 A・パンツォフ
 藤田 進
 川人 博
 有田秀生

ソビエトの未来 ●権威主義的ベレストロイカ論の台頭
 市民連合宣言 ●ルーマニア知識人のよびかけ
 日本砂漠学会 ●絆をこえた研究者の御わたり
 国際隊木学会 ●ほんとうの詩は国境を知らない
 宮澤賢治学会 イーハートンセンター ●豊津市へのステーション

矢澤修次郎
 市民連合
 小堀 巖
 岩城之徳
 入澤廣夫

第8号 特集II 東欧革命とは何だったのか

東欧革命とベレストロイカ ●希望はあるか？ S・フニキンスキ
 一九九〇年の「民主」とは何だったのか ●ハンガリーにおける革命の過程
 突貫する「連帯」 ●「革命」の先導者ポーランドの若者
 盗まれた革命 ●煉獄の中のルーマニア
 過去に呪縛される小さな民族 ●開戦をスロヴァキアに呼び戻す
 歴史の空白を生む危険 ●DDR消滅の意味
 東欧革命の日本的受容 ●社会主義の危機と資本主義の矛盾
 アンケート 東欧革命の教訓

羽場久渕子
 水谷 誠
 萩原 直
 長興 進
 下村由一
 加藤哲郎

イタリア共産党最後の大会で何が語られたか 後 房雄

国際論争 I 国家と民族をめぐって
 民族の最高目的は国家的独立だ ●反対側からの視点 F・ヴヌク
 歴史に殺られたのはなにか ●F・ヴヌク宛の公開書簡 L・ムニヤチコ
 舞台裏で起きていたこと ●舞臺ムニヤチコさん F・ヴヌク
 歴史作家と歴史作家 ●「歴史」と「歴史」の境 L・ムニヤチコ
 「湾岸戦争」は世界主義をすすめる ●歴史を動かした権力者 鷲田小彌太
 東独部のベンゲジレーたち ●統一後の「東ドイツ」の現在 照井日出喜
 新たな共産主義権力の現実 ●ルーマニア市民社会をポーランド人 M・ペレンティ

後 房雄
 F・ヴヌク
 L・ムニヤチコ
 F・ヴヌク
 L・ムニヤチコ
 鷲田小彌太
 照井日出喜
 M・ペレンティ

グラスノチをめぐる政治闘争・ソ連々メタメ的な変遷型 阿曾正浩
日本被爆者学会●権利保障と被爆者支援へ 宮澤浩一

第9号 特集 新理論潮流の可能性

社会主義の危機と新理論の可能性 平田清明
フミニズムをフミニズムから解放するために 加藤秀一
レニニオン・アプローチの挑戦●経済学から社会関係・国家論へ 若森肇孝
社会民主主義は自ら否定するか●その理論的限界と我が國の現実 新田俊三
個人主義と「社会的なもの」の解体(下)●「もう一種の」Fも必要か 杉山光信
環境破壊と経済理論●なぜエコロジストは無力なのか 関 曠野
「アゲート」 私が注目する新理論

問題化の新たな論理を求めて●選考をめぐるとして モデル木研究会
新・社会科学概論①態度としての社会科学 重本直利
選んだ「森園」の新たな挑戦●エニニズムの限界と新理論 柴 宣弘
正念場のベストロイヤル●地位に立つのは誰か クラシヴィリ
ロシア共和国における政党の再編成●大潮流と新政党
「ウアアリ」バストウホーフ タタロフスカヤ
楽観をゆるぎぬ弱小政党のゆくえ 左近 毅
選挙のゆくえは、そして共産党の運命は●「エニニ」再編成問題へ道 藤井一行
海外派兵・国防改革・「民主主義再構築」●「社会主義」への道 真田哲也
ソ連・危機脱出は可能か●社会主義の存続をめぐるとして 賢田小彌太
「選ばれ戦争」は歴史の新たな「仕分り」を迫る●藤田氏の論評に答えて 美 尚中

第10号 特集 世界の日本研究

近代の型と日本という謎(Ⅰ) ●日本社会は特殊か
J・アーナソン／中西新太郎訳
分化するジバノロジー●オーストラリアとヨーロッパの日本研究 加藤哲郎
オーストラリアのなかの日本●日本研究以前の諸問題 R・マーチ
日本認識における内なる自覚 高橋隆雄●「型」の日本研究をめぐる 伊 健次
在日外国人が見た日本、そしてわが祖国●日本に学ぶるか
A・イエニアノフ×A・ウオルフ×若長彬
「八月革命」はマルクス主義者に向を問うているか 中野徹三
新・社会科学概論②自己批判としての社会科学(下) 清 真人
ソ連共産党の解体とソルベチエフの責任●「型」も「様」もある 藤井一行
社会主義と資本主義の改革原理●どのように始めたらよいか 海野八尋
「他者」の立つ場所●「旅行者」探求●との対話 古茂田宏
ドイツ統一の任務について●ドイツ社会民主党大会への提言
SPD基本価値委員会／柴山健太郎訳
「体制転換」後に揺れるハンガリー●東洋に照らす政治原理 南塚信吾
狭容のモスクワ●市民にとっての八月の五日間 S・ガルネンコ
旧思案録をいかに読み解くべきか●社会主義の歴史と未来の展望 古藤孝平

第11号 特集 日本の知識人

終始、市民に生きる●いま、知識人にならなければならないか 久野 収
事実生きる●論争を回避する知識人 本多勝一
運動に生きる●左翼運動と知識人 安東仁兵衛

志に生きる●著者としての知識人への期待 西谷能雄
異端に生きる●政治のなかの知識人 石塚清倫
個人主義化と「社会的なもの」の解体(下) ●進歩の選別 杉山光信
近代の型と日本という謎(Ⅱ) ●日本のナショナリズムと近代概念
J・アーナソン／中西新太郎訳
日本的労働過程のフレキシブル・システムとは何か 京谷栄二
市民社会論・序説●歴史と個人との市民社会の限界と超越 藤葉振一郎
新・社会科学概論③三人称としての社会科学 竹内真造
新・社会科学概論④自己批判としての社会科学(下) 清 真人
コロニアと市民●自覚的人間理解の復興 関 曠野
ベトナムはどこへ行くのか●サイゴンとハノイの旗から 石川次郎
民族的排外主義に苦悶するハンガリー●現実の共生を模索するもの 南塚信吾

第12号 特集 揺れる日本の会社

法人資本主義の原理とその解体●会社主義の成立と変遷の条件 奥村 宏
「会社主義」の限界●企業と社会との関係と変遷 田畑 穂
日本型企業組織のなかの労働者●東洋銀行員から見た会社と個人 小磯彰夫
二つのフレキシブル・システム●日本型経営へのアプローチ 藤沢 誠
男女別労働管理の構造●日本の会社にとっての意義と変遷 服部良子
転機に立つ会社主義●企業主義のゆくえ 岩井克久×奥村宏
盛田昭夫「『日本型経営』が危い」を讀む
誰をとも壊すか「林正樹」 なが問題とされるべきか「大江秀典」
経済学に生きる●生活者知識人を育てるために 池上 博

過労死と社会科学●過労死をめぐるとして 川 川 博
労働者協同組合企業の挑戦●オルタナティブとしてのモデルラニ 石塚秀雄
「日本型資本主義」の選択●歴史意識のゆらぎのなかで 加茂利男
ソ連科学アカデミーの危機●苦悶する悪魔 伊 真孝之
新・社会科学概論⑤生きられる文化としての社会科学 赤井正二
農民になるもの●終極●都市の根本の要素 関 曠野
ハンガリー・地方自治の新展開●歴史のありかになる「革命」の象 南塚信吾

第13号 特集 日本国憲法の深層

憲法原理の再構成●新たな法規範としての可能性 高橋彦博
「解釈」そして「改正」を「入憲」？ ●「日本モデル」を立憲論 樋口陽一
聖典としての日本国憲法●罪からの救済を示す信仰倫理 長尾龍一
日本国憲法の可能性●憲法としての憲法の意義を話し 久野収×佐高信
アメリカから見た日本国憲法●社会性の比較としての移民と憲法 酒井直樹
地域の独自性と憲法の問題点●沖縄から見た日本国憲法 新崎盛暉
平和憲法・PKO・アジア●韓国から見た日本国憲法 鄭 成培
平和憲法のゆくえとアジアの期待●台湾から見た日本国憲法 許 介慎
在日韓人・朝鮮人の人権と日本国憲法●憲法が内面的に批判するもの 金 敬得
統一ドイツの安全保障政策と憲法問題●常駐特命使からのゆくえ 栗原 優
岐路に立つドイツ社会●日東強硬派の周辺化と労働運動の困難 真田哲也
現代日本の「社会」と「国家」●名前の問題と視角をめぐって 原 伸洋史
カナダ・ラティカル政治戦略●憲法から独立した経済活動 海野八尋
M.E.G.A.「マルクス・エンゲルス全集」はいまどうなっているか M・フント
哲学に生きる●現実との関係関係を失わない方法論のために 古田 光

新・社会科学概論⑤意識としての社会科学 吉田正吉
 「新ロシア革命」は「脱社会主義」か ●藤井一行 藤井一行
 帝国・対・民族 ●「経済危機」脱批判 関 廣野

不同第14号 特集 山 理想主義は復権しうるか
 地球時代のユートピア ●日本人の知取から構想する 井上ひさし
 精神の闇をいかに克服するか ●理想主義としての社会主義 加々美光行
 世紀末の理想主義 ●さまざまな「反システム的運動」の生音 美 尚中
 「翻身」の思想 ●農業復興の間に立ちはたかるとの懸 坂本進一郎
 「苦界浄土」の思想 ●もう一つの世界を探る 原田正純
 技術と技術者の孤軍思想 ●「人生の仮説」を検証する 畔上統雄
 共生と循環の農業 ●国民性・三区性をめざして 雄田 劭
 参加型市民社会へのプログラム ●産業化社会の最後の可能性 横田克己
 「西遊記」主義から「理想社会」主義へ ●オタクとオタクの分業 新島淳良
 エコシカル・ライフの実践 ●オカルトとしての社会運動 丸山茂樹
 理想に生きる ●トルストイに学ぶ絶対的善の思想 北御門二郎

現代医家の課題と社会科学 ●即原病院院長に聞く 増子忠道
 過労死をどうするか ●「確定」をなくして「疑念」を 大西 広
 知識人の転換可能性 ●旧(東)ドイツの場合
 H・ブルーム / 石井昌弘訳
 カナダのラディカルと社会運動 ●活動の歴史をまよるものはなにか
 W・K・キャロル / 海野八尋訳
 若者政治の二世紀 ●その波紋と惨劇から何を学ぶか 関 廣野
 原水爆反対の資格を問う ●疑うべき日本の「先進国」性 本多勝一

不同第15号 特集 山 政党政治の衰退

なぜ制度は空論化するのか ●目標にもとく新しい政治システムの構想 関 廣野
 政党イメージの再構成 ●変わる主体的政治参加の形式 高橋彦博
 政党政治の改革は可能か ●国民性から考える 古川 純
 「国対政治」に見る政党政治 ●幕の「シナリオ」でくりやめられるか 五十嵐仁
 世界の政党政治の変容 ●アメリカ・イギリス・ドイツ・フランスの政党改革 藤本一英
 政権交代のある民主主義 ●「人」の政治 ●多党の政治 ●日本の政党再編 後 房雄
 エコポリテイアスの浸透 ●統一ドイツにおける政党政治のゆらぎ 坪郷 賢
 「リベラル後」の政党政治 ●なぜ政党システムは危機に陥ったのか 眞柄秀子

アンケート 国会議員における政党への矛盾意識
 知識人たちへ ●行動する独立知識人の組織をつくらう K・ウオルフリン
 国運はもういらぬか ●求められるグローバル・フォーラム 吉田康彦
 「新ロシア革命」は社会主義指向か ●藤井一行教授に答える 上島 武
 未来との訣別 ●旧(西)ドイツの場合
 H・O・リーサー / 庄野信・水野邦彦訳
 症候移動時代のテーマ ●テイレンマを哲学する 大江秀典

不同第16号 特集 山 不況の経済学

経済学は不況をどう解きうるか ●市民の疑問に答える 海野八尋
 複合不況とはなにか ●宮崎義一「複合不況」論 佐藤良一
 バブル・エコノミーの政治経済学 ●その発生機構のメカニズムを解明する 芳賀健一
 平成不況を理解するためのアンケート ●ペンと筆の経済学 徳重昌志

生死観を交える高層医家 ●現代日本人の生死観① 上林茂暢
 ドイツにおける極右過激主義運動 ●「マイノリティ」の取巻 柴山健太郎
 中沢新一の数学適用を問う ●「野山集」『東方』を中心に読む 岡部恒治
 緊急事態宣言と選挙権批判(上) ●「命」を懸けた選挙権を争論 古座孝平
 死者たちとの対話 ●精神論的思考の可能性 清 真人
 二一世紀への論争主題 ●「働きすぎのアメリカ人」 青木圭介

不同第17号 特集 山 文明としての農業

農民に未来はあるか ●畦道農政の可能性を探る 坂本進一郎
 「生活者」から見た農業問題 ●多目農業をめぐってふたにたらない 河野直哉
 貿易自由化は至上命題か ●環境問題・健康・食料危機の観点から 梶井 功
 地球文明と農業の自己革新 ●工業社会のシレンマ 西川 潤
 農業における「近代化」を問う ●「三ノ田」の歴史的考察 飯沼二郎

シンポジウム 働きすぎのアメリカ人と日本人

J・シヨア / 十川人博・大塚真理・十加藤智郎
 音楽から見る生死観 ●現代日本人の生死観② 梅谷 薫
 ラテンアメリカ左翼はどこへ行くか ●物語から現実へ 渡津博明
 「日本人の超激物産の欲望」 ●「大東亜戦争」と「分断国家」日本 村井 紀
 楽主義の歴史 ●批判的考察(下) ●「分断国家」にまよる二つの軌跡 古座孝平

不同第18号 特集 山 中国はどこへ

鄧小平の最後の挑戦 ●「四ノオキ」的国民国家への道 加々美光行

「社会主義市場経済」のゆくえ ●四ノオキの議論を中心に 上原一廣
 地球環境の試金石としての中国 ●「資源可能な発展」は可能か 秋山紀子
 国家の自己融解の可能性 ●資料でなにが起っているか 斐田雅晴
 21世紀中国の三つのシナリオ ●グローバル化のなかの迷途 凌 星光
 商人に变身する中国知識人 ●「下海」現象の意味するもの 周 海林

近代の道化? ドイツの知識人 ●他者をしてみずから師らしめよ
 S・リヒター / 照井日出喜訳
 変貌する生死観 ●現代日本人の生死観③ 川上 武

家事労働はなぜタダか ●働きすぎ社会と女の時間の価値
 大塚真理からJ・シヨアへ
 わが人生 わが研究 ●シヨレス・メドベージエフ大いに語る
 シヨレス・メドベージエフ / 佐々木洋
 ロシア短信 ●大統領令と農産物生産者へのロシア人の態度 藤井一行

不同第19号 特集 山 変えよう! 大学

文化の焦点としての大学 ●都市の文化の創造的担い手たれ 関 廣野
 何のための大学改革か ●豊田小彌太教授の大学改革論への疑問 大庭 健
 大学評価の現状と課題 ●「ラジカル」化した大学に未来はない 有本 章
 私の愛蔵的文学後 ●「知」の家から「社会的サー」へ 小浜渡郎
 文部省はわかっているか ●大学改革論の歴史を語る 西尾幹二・天野都夫
 大学を養える新しい授業の試み
 現場からの法律学 ●社会科学者への提言 川人 博
 ビデオからの歴史学 ●近現代史の醍醐味を伝える 小田部雄次

映像による宗教学・イニエーションを理解させるために
 島田裕巳
 副読本による教育心理学・授業は学問のCMタイム
 守一雄
 発見させる経済学・自分の生き方をつくりあげるために
 岩田年浩
 元気の出る文化人類学・教育というフィールドワーク
 上田紀行
 シリアンにはなまなま●ミニエーションを論議する
 井上理

アンケート 全国大学教員

シニター・ベアスのイベント●家庭と他の文化のキチンガールの解
 ヲ・シヨアから大沢真理へ
 ロシアの政治はどこへ●なぜヨルバチヨフからシリノフスキーへか
 往復書簡 Z・メドベージェフ&R・メドベージェフ
 小野耕二
 歴史から見た現代学生観●平尾大津教授への感謝状の由来から
 加藤哲郎
 歴史における尊厳と無情●「男一」野坂参三の「百年」の読み方
 大内要三
 いわゆる排外言について
 江本嘉伸
 『チベット死者の書』の一人歩き

ポランディアからテロコシロナルへ●政府企業にぞろぞろ
 伊藤道雄
 企業と個人の愛を問う●会社員からの脱却を求めるフアンロビー
 高橋陽子
 コータイキターとしてのポランディア●学生と家の職業家のなかで
 山崎英貴子
 思想としてのポランディア●人はなぜポランディアをやるのか
 小川剛

北朝鮮は、金日成の銅像しか見えない国か
 李英和
 パート労働の日米比較をしよう

大沢真理からリ・シヨアへ

八年目のチェルノブイリと大統領選●ロシアはどこへ
 往復書簡 Z・メドベージェフ&R・メドベージェフ
 差別を大学はいかに教えるか●向和教育局運動に学ぶ
 林力
 なせ公益法人に「許可」が要するのか
 浅野晋
 ある日の入国管理局
 周海林
 小沢一郎と新聞記者
 江本嘉伸

季刊誌第20号 特集 山いま、なぜポランディアか

変わりはじめたポランディア●正と邪の間から深き海へ
 早瀬昇
 楽しんでこそ、ポランディア●主婦から国際ポランディアへ
 岡村真理子
 ポランディアという概念のない世界を求めて●読者読者なきをいふ
 鶴丸高史
 権利社会から機軸社会の時代へ●ふれあひの論議とはなにか
 堀田力
 企業がポランディアは本物か●積累をはじめた日本企業
 内藤敬子
 自立した市民としての国際ポランディア●身並をとるに困難がある
 根本悦子
 学生ポランディアの概念●「自分のため」と「社会のため」の綱で
 葛西裕英
 ポランディアの歴史から考える●外圧と自立の機軸的構想
 興相寛

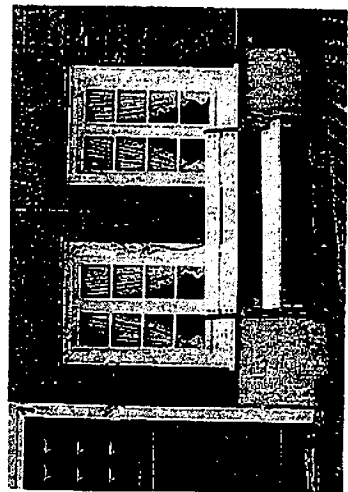
季刊誌第20号 特集 山いま、なぜポランディアか

日本のジャーナリストへ●スピーチライターと新聞
 K・ウォルフレン
 冒険と誘拐と報道●報道されて知ったマスコミの表と裏
 服部貴康
 新聞と政界再探と政治学者●佐々木毅氏の「金銭問題」
 杉山光信
 小沢一郎と新聞ジャーナリズム●西村隆史委員の孫とする
 石飛仁
 社内競争よ、起これ！●朝日新聞社での経験から
 大谷健
 ジャーナリスト意識の歴史●社主より社主たる人へ
 バサラ・プレス
 『週刊金曜日』に未来はあるか●一読者からあなたへの手紙
 高橋陽子
 日本ジャーナリズムの構造転換●メディア環境と倫理の貧困化
 香内三郎
 人間と歴史への執着●岩波書店のこれから
 安江良介

『時』と未来への越境●田畑書店のこれから
 石川次郎

アンケート 全国大学マスコミ関係講座教員

なぜ北朝鮮の真実が報道されないか●地獄ジャーナリズムに向う
 李英和
 ソルジエニーツインはどこへ行く●飛花となった帰国バコオーアンス
 往復書簡 Z・メドベージェフ&R・メドベージェフ
 スポーツ・ジャーナリストの願望●テレビジョンエーションとの差別
 林社一
 フロミニ・フアシズムを排す
 小浜逸郎
 モンゴルの文字改革と日本の支援
 江本嘉伸



von Helmut Stingl